

・ウジェーヌ・イザイ《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品27》の書法 ——ヴァイオリン奏法の視点から

イザイ Eugène Ysaÿe (1858~1931) の《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品 27》は、近年ヴァイオリン作品の中で最も注目されている作品と言えるだろう。この作品は、全曲がエリザベート国際コンクールの課題曲に上がっているにも関わらず、一般的な認知度は低いままであった。しかし、ギドン・クレメルや、フランク・ペーター・ツィマーマンによる全曲録音をきっかけとして、その認知度と注目度はヴァイオリニストの間で急激に高まり、現在では、多くのヴァイオリニストがこの作品に惹かれ全曲録音や、全曲コンサートに挑んでいる。このような動きは無伴奏ヴァイオリン作品においては、非常に珍しいものである。

イザイの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品 27》は、6 曲から構成されており、それぞれは高名なヴァイオリニスト達に献呈されている。献呈されたヴァイオリニスト達はいずれもイザイが友人であり、尊敬するヴァイオリニストであったためか、この作品には、他のヴァイオリニスト兼作曲家の作品には見られない書法が見られる。この書法については、ヴァイオリニストが演奏する際に感覚的に感じるもので、これまで深く言及される事はなかったため、本論文では、ヴァイオリン奏法の視点から分析する事で、この作品における独自性を示す事を目的としている。

第 1 章では、イザイが演奏家としてどのような存在であったのか、また、作品を概観する事で、彼の作曲家としての位置を述べる。

第 2 章では、《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品 27》の背景について述べる。第 1 節では、当時演奏されていた無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品を網羅的に概観し、また、ヴァイオリン演奏史と照らし合わせる事で、イザイがヴァイオリニスト兼作曲家としてどのような存在であったのかを明らかにし、無伴奏ヴァイオリン作品群におけるこの作品の位置を示す。第 2 節では、この作品の成立状況と、受容の動向について述べる。

第 3 章では、この作品の独特の書法を明らかにするための分析を行う。第 1 節では、6 曲すべてに共通して見られる書法について、独自の演奏指定記号、ボーイング、フィンガリングにわけて論じる。これらからは、ヴァイオリン演奏をする者でしか書きえない、演奏効果を挙げる目的を見いだす事ができる。第 2 節では、各曲それぞれの個性が独自の書法で書き分けられている事に注目する。献呈された人物の演奏スタイルや、作曲スタイルを意識したものもあれば、献呈された人物が弾いていた作品を手本にしたもの、また、自身の即興演奏のスタイルをそのまま作品の中で表現したもの、またヴィルトゥオーゾ的な奏法に技術誇示ではない、音楽的意味を持たせる目的のもの、個性は様々であるが、イザイはその個性をより音楽的に表現するために、ヴァイオリン奏法を書き分けている。ここでは、第 1 節で述べた、演奏効果を上げる工夫の上に、ヴァイオリンの表現力を最大限に駆使した書法が見られる。第 3 章の分析からは、ヴァイオリンの演奏効果の追求の上に個性が表現されている事から、この 6 曲の無伴奏ヴァイオリン・ソナタが自身の技術誇示ではなく、他のヴァイオリニストが演奏するための配慮が読みとれる。

ヴァイオリニスト兼作曲家の作品は、ほとんどが、技術誇示や、技術開発のためのもの

であった。対して、イザイの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品 27》における書法は、この部類には入らないものであり、ヴァイオリニスト兼作曲家の新しい作曲スタイルを確立できた作品である。これは時代の流れを見ても受け継がれることのなかった独特の書法であるが、近年、多くのヴァイオリニストに支持を受けている事からも注目すべき書法であり、ヴァイオリン作品の中でも重要な位置を占める作品であると言えるだろう。